

通級指導の可能性について

第48回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会 大会長
三重大学 教育学部 郷右近 歩

通級指導の歴史は、難聴・言語障害教育が根幹にあると理解している。近年、そこに発達障害教育が加わってきたことで、通級のニーズが急拡大した。今後は難聴・言語障害教育のニーズがある児童数が横ばいで進む一方で、発達障害児教育のニーズがある児童数は増えていくものと思われる。三重県の現状は、難聴・言語障害通級と、発達障害通級のバランスが大体保たれているが、今後そのバランスが崩れ、難聴・言語障害通級が少数派となった場合、全難言協として、どのように向き合っていくかが課題になると思う。望ましくないのは、二項対立になりお互いの協力関係に亀裂が入ることである。特に、これまで地道に専門性や歴史を積み重ねてきた、きこえとことばの教室の先生方の声が多数派の影に隠れ、拾い上げられなくなってしまうことがあってはならないと思っている。

二つの立場がある場合、もう一者が加わると、関係性が変化（安定）する。そこで、私は通級指導に「重症心身障害児通級」を加えることを提案してみたい。重症心身障害児の保護者として、自身の体験を交え、以下では三重県の実情を紹介する。

三重県では、病弱領域の特別支援学校は入院児のみを受け入れており、在宅の児童は在籍できず、病弱の特別支援学級を立ち上げることも（予算や人材等の面で）厳しい状況にある。医療技術が高度に発展し、人工呼吸器や経管栄養が必要な子どもたちの在宅介護が可能となってきた。病院もできるだけ早期の退院を勧める傾向にあり、在宅の重症心身障害児が増えている。三重県には、学校に通いたくても、適切な医療的支援が受けられる通学先が無いという重症心身障害児が少なからず存在する。全ての子どもたちに教育の機会を保障するために、通級指導が果たし得る役割があるのではないだろうか。

実現に向けては人材育成が課題となる。現在、重症心身障害児を指導できる通級指導教員がどれだけいるだろうか。私は三重県の独特な特別支援教育の実態を活かしたいと考えた。三重県では、学校の先生だけでなく、大学教員、保護者、行政機関、医療福祉関係の方々など、いろいろな方が本大会の運営にも携わっている。三重大学には附属病院と附属特別支援学校があり、小児科には院内学級もある。この三者が連携することで、全国的にも先進的な取り組みができるはずだった。病院の理解が得られており、保護者は私自身（大学の教育学部にお願いのできる立場）であり、日ごろから学校の先生方との関係も深い。複数の子どもの受け入れを前提として検討を進めたが、教育行政の立場から抑制的な力が加わり、実現は頓挫し、今なお厳しい状況にある。

以上を踏まえ、僭越ながら私から皆様に夏の宿題を出させて頂きたい。ご自分の地域の重症心身障害児教育がどうなっているか気にかけて頂けないだろうか。全ての子どもたちに教育の機会を保障するため、その機会がない子どもたちがいるという現状を是正してほしい。先生方には医師や保護者と気概をもって向き合ってもらいたい。私は「子どもたちのために」という一点で、今後も皆さんと一緒に協力していきたいと考えている。



（文責：全難言協 藤井 洸志郎）